彼女について知ることのすべて

佐藤正午

Sato Shogo

女子について知ることのすべて

佐藤正午
Sato Shogo

集英社

彼女について知ることのすべて

一九九五年七月二五日　第一刷発行

著者――佐藤正午
発行者――若菜正
発行所――株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇　〒一〇一―五〇
電話　〇三―三二三〇―六一〇〇（編集部）三二三〇―六三九三（販売部）
三二三〇―六〇八〇（制作部）
印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――文勇堂製本工業株式会社

著者との諒解により検印は廃止いたします。
定価は帯およびカバーに表示してあります。
©1995 Shougo Sato, Printed in Japan
ISBN4-08-774154-0 C0093
乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

目次

第一章　冬　5
第二章　春　69
第三章　夏　147
第四章　秋　273

写真　曽我尚弘

装丁　太田和彦

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

彼女について知ることのすべて

第一章　冬

1

その夜わたしは人を殺しに車を走らせていた。

一九八四年、ロサンゼルスでオリンピックが開催された夏の話だ。雨の少ない乾いた夏で、八月に入ると早くも水涸れの心配が持ち上がり、節水を呼びかける水道局の広報車を見かけぬ日はなかった。

あらかじめ女と取り決めていた時刻は十時。交叉点で信号を待ったとき、ダッシュボードの時計は九時を示していた。考え直す時間はまだ残っている。あるいはそのつもりで早くから街を走り回っていたのかもしれない。約束は十時。わたしはギアをローに入れた。次の瞬間、視線の先で、青いランプが夜の色に溶けた。息を呑むよりほかなかった。とつぜん暗闇が街を襲い、ありとあらゆるものが

黒く塗りこめられた。信号だけではなく街灯やビルの照明までが一斉に光を失ってしまったのだ。それが県下全域を巻き込んでの停電の瞬間だとは知るよしもなかった。我に返ったわたしは続けざまの急ブレーキとクラクションを耳にした。ヘッドライトの届かぬ深い闇のどこかで車どうしのぶつかる音が聞こえた。遠く近く衝突音は餅のように止まなかった。わたしは思った、これから起こる事の、不吉な前触れだろうか。チェンジレバーに添えた手がエンジンの振動のせいではなく震えているのが判った。誰かが車の窓をたたいた。わたしが振り向くまでたたき続けた。

そしてそれから正確に二時間後、送電が再開され街が普段通りの姿を取り戻したとき、すべては終っていた。事件はすでにわたし抜きで起こってしまっていたのだ。

わたしは女との約束を守れなかった。事件の真相についてはくわしく知らないし、また知る資格もない。当時の記憶をたどっていまわたしが語れるのは、次のような些細な事柄ばかりである。たとえば事件当夜、行き帰りにたびたびカー・ラジオから流れていたのはチェッカーズというバンドの曲だった。あるいは翌朝、電話のコールが鳴り響く直前に、卵焼きをはさんだだけのサンドイッチを食べていたこと。

食パンは古くてぱさぱさだった。インスタント・コーヒーは砂糖を入れないのに何故か甘ったるい味がした。テレビは女子の陸上競技を映していた。メアリ・デッカーがゾーラ・バッドと接触して転倒するまでの同じ映像が何度も何度も映し出された。わたしは上半身裸でトランクスだけを身につけていた。居間から台所に通じる戸も、庭に面した窓も開け放してあった。熊蟬がしきりに鳴いていた。激しい耳鳴りと錯覚するほどに鳴き続けていた。隣に住むアメリカ人の女の子が母親を呼ぶ声がした。母親の答える声は聞こえない。わたしは汗をかいていた。一晩まともに寝ていないので身体がだるかった。シャワーを浴びたかった。歯を磨いて冷たいシャワーを浴びよう、そう思った。食器を台所にさげるために立ち上がりかけた。電話が鳴ったのはそのときだった。

確かにどれもこれも些細な事柄ばかりだ。事件の核心からはほど遠く、記憶する値打さえもないと思う。にもかかわらず、わたしはそれらの一つ一つを決して忘れたことがない。もっと肝心な、かけがえのない記憶、女の笑う顔や、髪の匂いや、折り畳んだハンカチで顔をあおぐ癖や、そんなものと一緒にあの朝の、干からびた食パンの歯触りを忘れない。二人の長距離ランナーの脚が絡み合ったストップ・モーションや、マミーと叫んだ女の子の甲高い声や、電話が鳴るまえ一瞬イメージしたシャワーの飛沫をいまだに鮮明に憶えている。

事件の後、わたしは物語を一から組み立て直そうと努めてきた。彼女との出会いから、あるいは出会う以前から始めて、集めた記憶を時間通りに並べては、飽きずに並べ替えることを続けてきた。その途中で少しずつ判った。記憶は無数の泡のようなものだ。記憶のそばには必ず幾つもの記憶が、時間的なずれさえ含んだ記憶の群れがひしめいている。肝心な記憶のまわりを些細な事柄の記憶が取り囲み、いつか混じり合ってどこが中心なのかも判らなくなる。人は憶えていたいことだけを憶えているわけにはいかない。

事件が起こる前の年の冬、わたしは問題を二つ抱えていた。

一つは虫歯（左上の親不知（おやしらず））、もう一つは結婚である。

虫歯の方は手のほどこしようがなかった。わたしの歯痛はすでに職場でも有名で、当座しのぎに痛み止めを塗っては渋い顔をするのが同僚たちの笑いの種だった。親不知は抜くしかない。見かねた事務職員がそう言って歯医者を紹介してくれた。抜歯にかけては市内でも一番の腕という話で、いますぐにもと勧められたが、もうじき冬休みに入るからその間にと答えてお茶を濁していた。

一方、結婚については逆に打つべき手はほとんど打っていた。残ったのは単に言葉の問題に過ぎなかった。わたしの独り合点でなければの話だが、何ならクリスマスの朝までにはすべて片がついていたと言ってもかまわない。

結婚という言葉を使わなくとも、彼女がわたしと一緒になることを望んでいるのは判っていた。一度でも関係ができた以上、結婚を考えるのが自然のなりゆきだろう。たとえ一度きりでも。彼女がそう考えているのはよく判っていたし、わたしもまた同じ思いだった。同じ思いで一夜を過ごしたからである。結婚を頭に浮かべたのはあるいは男のわたしの方が先だったかもしれない。そういう男だと見極めた上で、彼女はわたしと寝たのかもしれない。

堅実な女だった。『アリとキリギリス』という童話があるが、人をときどきキリギリスのような気分にさせる女だった。職場ではもちろん私生活でもはめをはずすということがなかった。着る物も普段から地味で、入学式や卒業式といった特別な日にはたいていチャコール・グレイのスーツで現れる。金銭に細かいというほどでもないが、計算に強く、仲間うちで飲み食いするときは誰かが言いだす前に勘定をきれいに割ってみせた。

何よりも彼女が嫌っていたのは男の気まぐれである。その点では実に徹底していた。そばに寄る男たちを、まるで猫が人の顔色を読むようにじっと視つめる癖があり、気に入らぬと頭から軽蔑しきった表情になった。彼女は世の中の男という男を、気分屋の男たちすべてを軽蔑していた。そしてわたしは彼らの代表としての扱いを受けた。よほど日頃の言動に信が置けぬということだったのだろう、たとえば不意の誘いを露骨に迷惑がるので、最初のうちは食事にしても映画にしても必ず事前に約束を取り付けなければならなかった。待合せの喫茶店などで人眼を気にしながらわたしが下品な冗談をとばすと、聞こえぬふりをして話を逸らすかひたすらむっつり黙り込んだ。彼女が黙り込むといつも、いまのいままでそんなつもりもなかったのに、発作的にこの女を抱きたいという興奮に悩まされた。

初めて部屋に上げてもらった夜は霰が降った。バス停から五六分歩いてきただけで、ふたりとも凍えそうだった。おまけにわたしは急にぶり返した虫歯の疼きを堪えなければならなかった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

彼女の部屋は1DKの作りで、台所の様子はごく普通だったが、六畳間の方にはテレビが見当たらなかった。机と、二つの本棚と、小さな整理簞笥が壁に寄せて据えてあった。それから中央に冷えきった筒型のストーブ。他に眼をひく家具や装飾品の類はない。机の上にソニーの卓上ラジオが置いてあったが、彼女がスイッチを入れるとクリスマス・イブだというのに組閣のニュースを読むNHKのアナウンサーの声が流れた。

気が急いていたので部屋が暖まるまで待てそうになかった。ところが彼女は立て続けに用事を思いついては男の勢いに水をさした。ストーブに薬缶をかけるとか、炎の大きさを調節するとか、台所との仕切りの戸をきちんと閉めるとかそういったことだ。しまいに、まるで世間知らずの弟に噛んで含めるように（実際むこうが一つ年上だったのだが）、チャコール・グレイのスーツが皺になるのを用心してみせ、着替えるため台所に閉じこもった。わたしはバス停からずっと彼女の手を握ったままだった。おそらく右手は汗ばみ、左手はかじかんでいたと思う。ラジオによるとあさって特別国会が召集された後に中曾根首相は組閣に着手する模様だった。

その夜のわたしは完全にしらふである。その夜にかぎらず彼女の前では常にしらふだった。ちょうど飲酒の習慣をきっぱり改めていた時期で、アルコールに頼るわけにはいかなかった。やがて待ちかねた時が訪れると、終始、わたしは本棚に飾ってある地球儀を眺めて気を逸らした。部屋の灯りは消えていたから、いったい地球上のどの国に視線を向けているのか明確ではなかったし、そんなことで効果が上がるのかどうかも覚束なかった。が、ストーブの炎の色にうっすら映えて、女の手が掛布団の端を握りしめているのは判った。ほんの一瞬だが力いっぱいという表情の手つきだった。その一瞬の、たった一齣を眼に焼き付けたあと、わたしは布団の外に転がり出ていた。

「妊娠したらどうするの」と女の囁き声が言った。わたしを突きとばした手は額に置かれ、そっと汗をおさえるような恰好だった。また虫歯が疼いた。わたしは黙って左の頬をさすりながら机まで歩

き、椅子にかけてあった上着の内ポケットを探った。そのときラジオからは低い音量でバイオリンの音色が流れていた。バッハのシャコンヌだった。わたしにクラシックの趣味はないのだが、コンドームの袋を破っていると布団の中から彼女がそう教えたのだ。

そして翌朝、晴れ上がったクリスマスの朝、われわれは結婚という言葉を使わぬまま、すでに結婚を決めていた。彼女がわたしを将来の夫として見ているのは疑いようがなかった。自分がわたしにどう見られているかを彼女が承知しているのも疑いようがなかった。

われわれは結婚するだろう。第一に、ふたりともいまや将来を見定める年齢にさしかかっている。しかも第二に、われわれの所属する県の教育委員会は小学校教員の勤務地を市内、郡部、離島の三つの区域に分け、少なくとも三年間（長ければ倍の六年間）を離島に勤務しなければならない決りを設けている。それも二十代での赴任が慣例である。彼女にもわたしにもいずれ近い将来、辞令が下りるのはまちがいない。とどのつまりはそういうことだった。娯楽といえば魚釣りしかない小さな島へ渡る前に、生徒数が五十人にも充たない分校の先生として長い年月を暮す前に、われわれがともに堅実に将来を決めにかかったのは当然といえば当然だったのである。

地味で堅実な将来へ眼を向けること、それだけが男と女の関係のすべてだとわたしは思っていた。わたしはいつになくその朝の気分を信頼できた。自分の将来は、自分ひとりの手でずっと先まで決められる。半年まえ禁酒を誓い、意図した通り乱れた生活を立て直したように、未来も、頭に描いたものをそっくりそのままの姿で手に入れることができる。そんな漠然とした予感に捕らえられていた。きっとわたしはこの女と結婚するだろう。

彼女は朝食に卵とベーコンを焼いてくれた。それにトーストとコーヒーと半分ずつの林檎を、われわれは台所のテーブルで寡黙にたいらげた。わたしのすわった位置から六畳間の窓が視界に入った。陽差しは届いていなかったが、そこに下がった白いレースのカーテンが外にあふれた光を湛えてい

た。筆先に似た形の樹木の模様が、一本残らず新雪を頂いているように輝いて見えた。ラジオはその朝もクラシックを流していた。彼女はわたしの方にテレビ欄を向けて朝日新聞を読み、わたしは二杯目のコーヒーを啜っていた。われわれはほとんど何も喋らなかった。朝刊を四つに折り畳みながら、ふいに思い出したように、読む？　と彼女が訊ねたけれど、むろんニュースならゆうべラジオで聞いていたのでいまさら読む必要はなかった。

2

年が明けて三日目のことだ。

午後からわたしは駅前のターミナル・ビルへ出向いた。用件は別にあったのだが、その日はちょうど彼女が帰省先から戻る日にあたっていて、運が良ければ会えるかもしれぬという期待はあった。運が良ければ。

建物の中はおもに空港へ向う人々で混雑していた。到着するバスから降りて来る客はまばらだった。発車時刻を待つ客と彼らの荷物とで待合所の椅子は埋めつくされ、一階と二階に設けられた喫茶室にも空席はなかった。わたしは二階まで吹き抜きになった待合所の片隅に立ち、壁にもたれて長い間バスの出入りを眺めていた。その間に時田直美という名の生徒の家へ二度電話をかけた。

三時過ぎに、まず生徒の乗ったバスが到着し、それから数分の間隔をおいて彼女のバスが着いた。もう一人の女を伴って彼女がバスを降りて来たとき、わたしは時田直美の手を握って三度目の電話をかけている最中だった。

笠松先生だよ、と時田直美が先に見つけてわたしの手を振りほどいた。受話器を置いてから振り向

くと、生徒の前にしゃがみこんだ女がわたしを見上げて、いきなり、
「またやったのね」
と眉をひそめた。それが新しい年に初めて見る彼女の顔だった。不機嫌のもとはむろん時田直美にあったのだが、わたしがそこにいること自体もいくらかは気に障ったのかもしれない。出迎えは無用だと年末に見送ったとき話はついていたからだ。帰省といっても彼女の実家のある町は、ターミナルからバスで二時間程度の距離なのである。
わたしは無言でうなずいてみせ、追いついたという感じで彼女の脇に立った見知らぬ女に眼をやった。挨拶をかわす暇もなく、先に相手が微笑みを浮かべたので、わたしも釣られて口もとをゆるめた。
「ごめんなさい笠松先生」
と時田直美が決り文句を呟き、いつものようにうつむいて担任の女教師とは眼を合わせない。彼女のほうは苦り切った表情で叩きたいのをどうにか堪えているようだった。その場で実際に彼女が時田の頬を平手で叩いたとしても、別に驚くほどのことではなかったのだが。
時田さん、と抑えた口調で彼女が何か言いかけた。それを遮るように腰をかがめた見知らぬ女が陽気な声をあげた。
「可愛いね、きみ、お人形さんみたいだね。三千代(みちよ)さんの受持ちの子?」
赤いダッフルコートにナップサックを背負った直美が、上眼づかいに笑いながらわたしに身体を擦り寄せ、後じさりした。笠松先生と呼ばれ、三千代さんとも呼ばれた女は迷惑そうに脇を見返っただけで何も答えない。わたしが言った。
「事情はあとで。とにかく車で送ろう」
「車?」笠松三千代が聞き咎めた。

「うん、すぐそこの駐車場に置いてきた」
直美がわたしの真後ろにまわり、ジャンパーの裾を引っ張った。
「よかったら一緒に送りましょうか」
女は思案顔になった。初対面で気兼ねをしているのかと思ったがそうではなくて、知り合いが迎えに来ることになっていると言う。しかしその知り合いの姿が見えない。とにかく連絡を取ってみると言い残し、数台並んでいるうちのいちばん奥の公衆電話まで歩いていった。
「どうしてあんなこと言うの」
立ち上がった笠松三千代が低い声で不満を洩らした。
「一緒に送りましょうかなんて、余計なお世話じゃない」
「親切で言ったんだ。友達だろ？」
「友達なんかじゃないわよ」
「誰なんだ？」
笠松三千代は口を噤んだ。直美が聞耳を立てていた。わたしはジャンパーの裾をつかませたまま自動販売機まで歩き、缶詰のオレンジ・ジュースを買い与えた。そこへ電話を終えたばかりの女が歩み寄り、さきほどと同じように微笑みを浮かべて、連絡がつかないのでご一緒させてくださいと頼んだ。
車の中で、女は旅行鞄のポケットからアーモンド・チョコレートを取り出して直美を喜ばせた。その様子をルームミラーで覗いていると、眼の合った女がわたしにも一つ勧めた。
「このひと虫歯なの」
と笠松三千代が答えた。一言きりのあまりにも無愛想な返事だったので、つい魔がさしたのだと思う。

「だいじょうぶ、痛くない方で食べるから」
信号待ちの最中である。先生、ほら、と直美が後ろから声をかけた。何げなく顔を向けると、すぐ眼の前にチョコレートをつまんだ指先があり、咄嗟に口にくわえるまでそれが女の指だとは気がつかなかった。
少し遠回りしてはじめに女を降ろし、時田直美の家へ車を走らせた。女が降りてしまうと誰も口をきかなくなった。時田直美が母親と二人で住むマンションは大通りから一本引っ込んだだけの道路際に建っている。入口をふさいで宅急便のトラックが止っていたので、かなり手前でブレーキを踏んだ。停車しても誰も口をきこうとしなかった。右手に小さな公園が見えたが遊んでいる子供はいなかった。左手に並んだ建物のせいで陽も射していない。
わたしはまず外へ飛び出した直美を呼び止め、次に助手席に向い、どうする、と訊ねた。どうするって何を、と笠松三千代が答えたのでまた黙り込んだ。
「何を話せっていうの、あの母親と。毎回毎回おなじことの繰り返しで疲れるだけよ。会っても無駄よ」
早口でそう言ってから彼女は付け加えた。
「それに母親からの電話を受けたのはあなたでしょ?」
時田直美の担任はきみだ、とわたしは口の中で呟いた。彼女は両手で顔を洗うような仕草をして隙間から短く息を吐いた。それが終るとドアの窓を下げて、時田さん、と大きめの声で外へ呼びかけた。もっと近くに来なさい。片手にナップサックをぶらさげ、空いた手で薬局の前に出ている置物の象の耳をいじっていた生徒が、はい、と答えてうつむいたままドアのそばに立った。
「黙ってひとりで他所へ行くのはいけないことだってわかってるわね」
「はい」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.